佛教大学社会学部論集　第54号（2012年3月）

カール・ラートゲンの少年期と青年期（下）

――歴史のなかの自我形成と思想形成――

野　﨑　敏　郎

〔抄　録〕

偏頭痛の発症に悩まされたラートゲンは，療養と自己コントロールに努め，ようやく1872年にヴァイマルのギムナージウムに復学する。復学後は，体調管理に一定の成功を収め，歴史への関心を深め，大学入学資格を取得する。一方，ラートゲン家の人々は，シュレースヴィヒ=ホルシュタインのプロイセンへの併合を経験し，その後のビスマルクがすすめるプロイセン主導の国づくりへの反感を強めつつ，しだいに自由主義的志向性を確固たるものとしていく。ラートゲンもまた，そうした志向性を共有しつつシュトラースブルク大学へと進学する。

キーワード　ラートゲン，シュレースヴィヒ=ホルシュタイン，ビスマルク，小ドイツ主義

Ⅵ　偏頭痛体質とその対症療法

ラートゲンの健康問題のなかで，後年にいたるまで長く尾を引いたのは重度の偏頭痛体質である。少年期にかんしては記録が乏しいが，青年期以降の彼の書簡にはこのことが明記されているので，これを参照しながら，少年期から青年期にかけて彼を悩ませつづけた体調不良について確認しよう。

書簡のなかから関連記述を拾ってみると，彼は，シュトラースブルク大学在学中の1877年1～2月に数週間伏せっている（ラートゲンの1877年2月5日付ファーナム宛書簡(48)）。病状は記されていないが，これが偏頭痛のためであった可能性が高い。ライプツィヒ大学在学中の1879年10月末にも偏頭痛に悩まされ（1879年11月1日付書簡），12月4日にもひどい痛みに襲われている（1879年12月5日付書簡）。滞日中にも激しい偏頭痛のため休講を余儀なくされ，一週間も台無しにしている（1883年4月21日付書簡）。翌年も頭痛がぶりかえし（1884年5月29日付書簡），そのまた翌年には，頭痛を克服するためにあえて遠出（Luft-

veränderung）を試み，横須賀まで足を伸ばしている（1885 年 3 月 2 日付書簡）。さらに次の年には，頭痛対策として，山の空気を吸い，伊香保温泉に浸かっている（1886 年 5 月 13 日付書簡）。その夏の中国旅行中にも頭痛に襲われ（1886 年 8 月 28 日頃の書簡），その次の年にも頭痛のため手紙を書けない状態が続いた（1887 年 4 月 14 日付書簡）。離日直前にも頭痛に見舞われている（1890 年 4 月 15 日付書簡）。

ここには三つの傾向が認められる。第一に，偏頭痛に襲われるのが 3 月頃から 5 月頃にかけてであることが多く，このことから，この頭痛には季節性ないし周期性があるらしいということである。

第二に，その時期以外に偏頭痛に見舞われているケースをみると，ストレスの高まった状況が偏頭痛を招いていると思われることである。それは，大学入学後一年を経過しようとしている頃（1877 年 1～2 月），ライプツィヒ大学で司法官試補試験に向けて猛勉強中の 1879 年 10 月末および 12 月，長期にわたる中国旅行の最中（1886 年 8 月）である。大学に入学したばかりで戸惑うことの多い第一年次が終わる頃，激しく消耗する受験勉強中，はじめて訪れた国における長期旅行といった状況が大きなストレスを招き，それが発症の引き金になっているのであろう。

第三に，発症期間はしだいに短くなり，その症状もしだいに軽減されつつあるらしいことである。偏頭痛が発症すると，ときには数週間にもわたって，授業等の知的活動をいっさい放棄しなくてはならず，書簡を書くことすらできなかった。しかし 1877 年 1～2 月（当時 20 歳）には数週間であった発症期間が，1883 年 4 月（当時 26 歳）には一週間ほどになっている。また初期には，発症中はひたすら安静にしているしか術がなかったのが，1884 年 5 月（当時 27 歳）になると，発症中であるにもかかわらず，東京から横須賀まで遠出をすることができた。年齢を重ねるにつれ，彼は体力をつけ，偏頭痛への自分なりの対症療法を工夫できるようになったのであろう。

このやっかいな偏頭痛の発症にたいするラートゲンの対策は，静養に努めること，逆に遠方まで足を伸ばして気分転換をすること，山の空気を吸うこと，温泉療養をすることなどである。彼が日本に来たのは 1882 年であり，産業化がすすむなかで，彼の住んでいる東京の空気は悪化の一途を辿ったはずであり，質の悪い空気が頭痛の誘発要因になったかもしれない。そして山の清浄な空気や温泉は頭痛を鎮める効果をもっていたのであろう。

こうした青年期・滞日期の対症療法は，彼の幼少期・少年期にもとられていた。幼少期・少年期に，彼は父または母に連れられてあちこち旅行しており，それは保養目的もあったとみられ，その滞在先は山間・谷間・寒村であることが多い。彼が生まれそだったのはヴァイマルだが，こうした小都市であっても，産業革命が進行しつつある時期には，市内で多くの小工場が忙しく稼働し，蒸気機関車もひんぱんに往復して煤煙を吐き，工場・住宅・公共施設関係の建設工事や，道路・河川・鉄道・ライフライン関係の土木工事がいたるところですすめられて煤

塵が巻きあがり，大気はかなり汚染されていたと推察される。ラートゲン一家が住んでいたのはロルプラッツ9番地で(49)，市の中心部である。そして両親は，次男のために空気の澄んだ鄙びた地方を保養地として選んでいた形跡がある。

実際，彼の転校先・シャフナー学院があるグンペルダは寒村であり，またシュレースヴィヒ=ホルシュタインに転地したときも，親戚のいるエッケルンフェルデではなく，わざわざその近郊の小集落ホフヌングスタールに寄宿先を求めている。さらに父は，カールを温泉地カールスバートに連れていっており，家庭教師アマンダは，ホフヌングスタールからヴァイマルに戻ったカールにたいして，「温泉小旅行が必要ないか教えてちょうだい」と書きおくっている(50)。カールに転地や温泉療養が必要であることは，肉親や家庭教師のあいだで共通認識になっていたのである。

少年期の記録と青年期・滞日期の書簡記述とを突きあわせて勘案すると，正確な病因・病名は判然としないが，彼の主要な病疾問題はこの重度の偏頭痛体質であり(51)，少年期における彼の鄙辺への転地や温泉療養は偏頭痛対策であったと推定できる。

こうしたことから考えると，彼の体質と病疾はきわめて対処困難なものであった可能性が高い。まず，暑さに弱いという体質上の問題がある。さらにギムナージウムに入学して抱えこむことになった大きなストレスは，繊細な彼の肉体に甚大な影響を及ぼし，それは偏頭痛というかたちで表面化した。青年期においても，激しい偏頭痛に見舞われると何日も身動きができないほどだったから，少年期にはなおいっそう肉体的負担が大きかったことであろう。この偏頭痛が起きないようにし，またその症状を鎮めるためには，澄んだ空気を与えることと温泉療養が有効であった。そして頭痛防止のためには，彼の日常生活環境を快適なものに調え，極力ストレスを避ける必要もあった。具体的には，都市を離れ，空気清浄な鄙びた地方に転地することである。そのさい，彼は暑さに弱いから，暑い地方は避けなくてはならない。それだけでなく，転地先でも当然良好な教育環境を確保しなくてはならない。だから両親は，彼をカールスバートに連れていって療養させるとともに，彼がなんとか快適に過ごし，学ぶことのできる地方・環境を探して奔走し，ホフヌングスタールのベーク家をみつけたのである。

Ⅶ　ギムナージウム後半期の足跡

ホフヌングスタールで保養に努めながら勉学に励んだ彼は，その後WEGに再転入する。大学入学資格試験関連文書に記されている進路表によると，1876年3月に大学入学資格を取得するまで彼がWEGに在籍していた期間は „3¾“ 年（3年9カ月）である(52)。ここから逆算すると，彼がWEGに再転入したのは1872年7月頃であり，これは，この年の学籍登録簿における登録順が57番とやや遅いことと符合している。またこの年の席次は同学年28名中25番であり，やはり前年次から在籍している生徒の後ろに回されていることが明らかである

（既出表Ⅴ–1）。

前掲のアマンダ書簡によると，彼は，遅くとも 1872 年 3 月下旬までにはホフヌングスタールを離れてヴァイマルに戻っているはずだが，なんといっても 1869 年春に復学を急いで失敗した苦い経験を経ており，また春に偏頭痛が起きるという青年期の症状がこのときすでに現れていたとすると，3〜6 月頃にはことのほか注意が必要だから，このとき彼と両親は慎重に事を運び，自宅で数カ月間静養したのち 7 月頃に復学に踏みきったと考えると筋が通る。

1872 年秋の通信簿において，彼の欠席時間数はゼロとされているが[53]，これは，この年の夏学期に皆勤したというよりは，彼は 7 月頃（つまり夏季休暇に入る直前頃）に転入したので，もともとこの学期に在籍した日数そのものがきわめて僅少だったことを反映した事態にすぎないのであろう。しかしつづく 1872/73 年冬学期の欠席時間数はわずか 19 時間だから[54]，健康状態がなんとか安定し，ヴァイマルのギムナージウムにおける学校生活がようやく軌道に乗ってきたことを窺うことができる。

遺されているさまざまな記録を照合・整序・整理すると，以下のような事実が浮上する。カールは，1867 年 4 月に WEG に入学したものの，生来の体質に加えて，父からの過大な期待に由来するプレッシャーを感じとり，また第一学年特有のストレスにも誘発されて，激しい偏頭痛を発症し，さらに夏場の暑さに耐えかねて体力を消耗し，ついに 1867 年夏学期を終えることなく WEG からの中退を余儀なくされ，しばらく保養したのち，1868 年春以前にグンペルダのシャフナー学院へと転出する。ここでも病疾のため学習は妨げられたが，自然に囲まれた環境のなかで，知育偏重でない全人教育の方針のもと，小人数で親密な学校生活をのびのびと送ることができ，また友達も得ることができた。こうして健康を恢復しつつあった彼は，しかし父の方針で 1869 年 4 月頃に WEG に復帰することになる。すると今度は，シャフナー学院を強引に中退させられたショックも加わってふたたび心身状態が不安定化し，欠席時間数が膨れあがる。こうして彼は 1870 年秋頃に再度 WEG を退学し，シュレースヴィヒ=ホルシュタインへと転出し，ホフヌングスタールで保養に努めながら家庭教師アマンダに就いて学習を積み，1872 年 3 月頃にヴァイマルに戻り，さらに数カ月間経過を観察してから，同年 7 月頃に WEG に再復学し，1876 年 3 月にここで大学入学資格を取得するのである。

彼は WEG から二度転出し，また WEG に二度転入している。年次途中の――また短期間に度重なる――転出・転入は，急迫した事態に対応するものであり，それは彼の繊細で虚弱な体質や疾患によって余儀なくされたものである。彼の父はこの間（かん）ずっとヴァイマルに勤務しており，彼の家庭内に転出すべき理由はみあたらない。

彼の修学状況について概観しておこう。まず，シャフナー学院の親友バウムガルテル少年は，1869 年春にカールが WEG に復学したのち，「またクラスで一番かい」と尋ねている[55]。このことから，1867 年に WEG に入学した当初，カールの成績はトップクラスだったと推察される。ただし既述のように，中途退学した彼のこのときの通信簿は作成されなかっ

表Ⅶ–1　WEG 在籍生徒数の推移

年	第Ⅱb 学年	第Ⅱa 学年	第Ⅰb 学年	第Ⅰa 学年
1857	25	11	21	16
1858	24	24	13	17
1859	25	25	17	13
1860	36	25	27	16
1861	34	32	18	27
1862	24	27	27	19
1863	23	21	25	27
1864	31	16	23	15
1865	31	28	18	21
1866	25	30	24	16
1867	36	17	26	18
1868	26	25	13	24
1869	35	20	19	8
1870	30	27	15	15
1871	39	21	21	3
1872	32	34	18	20
1873	**28**	23	29	18
1874	38	**24**	21	25
1875	20	30	**14**	20
1876	26	36	24	**12**
1877	30	22	28	13
1878	31	29	20	17
1879	36	27	23	15
1880	35	32	20	20
1881	35	30	33	12
1882	29	28	27	23
1883	41	25	17	18

注：　各年復活祭（年次末）の在籍生徒数をしめす。右斜め下向きの矢印は，その学生たちが次年度進級した場合どの位置に移動するかをしめす。留年した生徒は真下に移動する。太字はラートゲンの所属クラスをしめす。

出典：　WEG『学事年報』各年次の Rangordnung（1867 年からは Verzeichnis der Schüler）欄による。*Jahresbericht über das Wilhelm-Ernstische Gymnasium zu Weimar*（各年次）．Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar.

た。

シャフナー学院から復学して以後の修学状況について検討しようとすると，転入年である第Ⅳ学年と第Ⅱb 学年の席次は，前記の理由から，彼の学習水準をまったく反映していないことが明らかで，これは参考にならない。したがって，同学年生中における彼の位置は，第Ⅱa 学年，第Ⅰb 学年，第Ⅰa 学年の席次（それはその前年次における成績を反映している）から判断するのが妥当である。この三学年における彼の席次は，それぞれ 24 人中 14 番，14 人中 8 番，12 人中 5 番であり，三年間ほぼ中位を保っている。しかし表Ⅶ–1 にみるように，学年がすすむにつれ，一般に同学年生数は逓減する傾向があり(56)，彼の同学年生数もたしかに減っているから，上級学年になるにつれて生徒がしだいに淘汰され，第Ⅰb 学年や第Ⅰa 学年になると優秀な生徒のみが残っていると推察される。また留年してラートゲンと同じ学年になった年長の生徒が成績上位に入ってくるケースもある。こうした事情を勘案すると，彼の成績がけ

っして伸びなやんでいたわけではないことが理解できる。ただ，彼の同学年生中では，のちにエルフルトの行政官になるポーレや，後年法制史学者として大成するイェルスらの成績が抜群で，病気がちだったラートゲンはちょっと太刀打ちができなかったようだ。

それでも彼は，1874 年にはランケのヴァレンシュタイン論の読解によって，1875 年にはモムゼンの『ローマ史』の読解によって，学校から表彰を受けている(57)。再転入後の 3 年 9 カ月間は，とにかく脱落せず大過なく過ごすことができたということだけでも，彼と彼の家族にとっては感謝すべきであった。上級学年になり，体力もつき，ストレスもある程度コントロールできるようになり，またようやく同学年生とも打ちとけることができたことが大きかったのであろう(58)。この時期に，たしかに彼は生来の快活さを取りもどしつつあった(59)。

大学入学資格試験合格者の成績証明によると，「宗教」「ラテン語」「ギリシャ語」「ドイツ語」「数学」「物理学」「フランス語」「歴史・地理学」の 8 科目中，ラートゲンは「ラテン語」「ギリシャ語」が評価「2」(60)であるが，残りの 6 科目は「1」であり，総合成績では，「修学」「品行」ともに「Ⅰ」の評価を得ている。総合が両方とも「Ⅰ」であるのは，11 名(61)の資格取得者中，彼以外にはポーレとヴァイネックの二名しかいないから，席次 5 番のラートゲンは，最終学年修了時までの一年間に成績をかなり向上させたと判断できる。ギムナージウム在学期の前半期は，健康上の理由から二度にわたって脱落・転地を余儀なくされ，そのため学業にも悪影響があったものの，ヴァイマル（自宅）に落ちついて勉学に励むことができるようになってからは，歴史を中心として成績が上向いたのであろう。1876 年 3 月 29 日に催された修了記念式典において，修了生を代表して，ラテン語でスピーチをおこなったイェルスとともに，ラートゲンはドイツ語でスピーチを披露している(62)。療養・保養と転校にともなう本人と家族・親戚の数多の労苦を経て，優秀な成績で大学資格取得にまで漕ぎつけたので，両親にとっても喜びはひとしおであった(63)。

Ⅷ　幼少期・ギムナージウム時代の苦闘と成長

カール・ラートゲンは特異な成長過程を辿った。ラートゲン家やニーブール家は，その経験した苦難のなかで多くの支援者や友人を獲得しており，また両家とも出産確率において女系が優勢ななかで男子が産まれたことから，この子は大きな祝福を受けた。トヴェステン家・ヘンスラー家・ベーレンス家の人々も，それぞれの家系において男子が早世することが多かったこともあって，この子に大きな期待を寄せた。しかもこの子は体質が虚弱であったことから，なおいっそう周囲の人から気遣われ，実際に多くの人の支援を得た。幼少期においてすでに多くの人から健康上の助言を受け，保養・療養のために各地を訪れ，そこにおいても多くの人と接し，父母の知り合いの家に厄介になることもあった。母は，かなりの頻度で郷里の親戚を訪ねており，カールも同道することがあった。

保養のため長期滞在することもあった父母の郷里において，かつてシュレースヴィヒ=ホルシュタイン蜂起の困難な局面において献身的に尽力したピンネベルクの地方長官の存在はけっして忘れられておらず（Olshausen ca. 1943: 107），少年は，そうした父への称賛を聞かされるのが常であった。したがって，ヴァイマル生まれではあっても，出自がシュレースヴィヒ=ホルシュタインであるという意識が強く刻まれることになった。このことは，彼のナショナリズムのありかを考察するうえで重要である。

短期間ながら在学したシャフナー学院においては，知育のみならず体育にも力が入れられ，修学旅行によって見聞を広めることも重視された。この経験は，少年の視野を拡げ，後年世界中を歩きまわる彼の原体験ともなった。また全人教育の理念のもと，彼は農作業・植樹活動等に参加し，自然や農業への眼差しを涵養した。このことは，後年における日本の地域政策や農業・農民・農村問題へのアプローチへと繋がっている(64)。

ヴァイマルの行政官である父は幅広く人脈を拡げ，母は文化人とのつきあいを好み，次男を連れて，遠路を厭うことなく，知遇を得た人々を訪問したから，この少年は，ヴァイマルのみならずドイツ各地の行政官や文化人に身近に接した。カールは，ラートゲン家・ニーブール家の親類縁者，シュレースヴィヒ=ホルシュタイン蜂起の関係者，サヴィニーなどニーブールに関係のある人々，ヴァイマルの官僚・教育関係者・文化人たち，それに年の離れた姉兄・義兄たちに囲まれ，彼らに――健康な子供以上に――大きく依存しながら育った。

彼は，これらの人々がラートゲン家の次男にたいして向ける特別な眼差しを強く感じとった。ラートゲン家の次代を担う者として扱われる待遇は彼のプライドをかきたて，年の離れた病弱な弟にたいする姉兄・義兄たちの気遣いは，暖かい毛布にくるまれているような快適さを彼に提供した。ラートゲン家の――あるいはむしろ歴史的変動に翻弄されてきたシュレースヴィヒ=ホルシュタイン人の――将来を託された彼にとって，その温情と期待の重みとは息苦しいほどであった。そうした周囲の人々の気遣いと励ましとは，ストレスとなっていっそう強く彼の肉体を苛んだ。病弱で，いつも誰かに世話をしてもらう必要のあった彼は，しだいに，つねに周囲の様子を窺いながら行動する慎重さと，周りの人たちの自分にたいする対応・反応を斟酌する繊細さとを身につけるようになっていた(65)。少年は，みずからの肉体と精神をコントロールしようと必死にもがき，ようやくギムナージウム時代後半期にある程度それに成功し，成績を向上させ，とくに歴史への関心を深めていったのである。

ギムナージウム修了までの彼の歩みを概括すると，それは，①快活で活動的・社交的な幼少期（1867年3月まで），②父や周囲の人々からのプレッシャーを受け，肉体の異常に苦しみ，なおいっそう周囲の人々の様子を窺いながら行動する慎重さを身につけるとともに，転地・転校によって見聞を広めたギムナージウム前半期（1867年4月～1872年6月頃），③ヴァイマルに落ちついて勉学に励み，歴史への関心を深め，シュレースヴィヒ=ホルシュタイン人の次代の担い手としての自覚を強めていったギムナージウム後半期（1872年7月頃～1876年

3 月）――この三つに区分するのが適切であろう。

Ⅸ　ラートゲン家の歩みと次世代の成長

カール・ラートゲンの幼少期・ギムナージウム時代は，健康を損ね，療養・保養のため各地を転々とせざるをえなかった苦い思い出を残したが，この時期は，ラートゲン家にとって――あるいはシュレースヴィヒ=ホルシュタイン人にとって――重要な出来事が重なっている。そしてそれは，姉兄たちから，末っ子カールにも伝えられ，それはこの少年にとって自己形成の重要な契機となった。

こうした精神的刻印について考えるためには，カールの誕生（1856 年）よりもすこしさかのぼって，1848 年のシュレースヴィヒ=ホルシュタイン蜂起の顛末からみる必要がある。長男ベルンハルト（1847 年生）と三女ルーツィエ（1850 年生）は，蜂起から追放までの経緯を直接記憶していない。これにたいして，長女イーナ（1842 年生）と次女トーニ（1844 年生）は，それを生々しく記憶に焼きつけている。

1848 年 3 月に樹立されたシュレースヴィヒ=ホルシュタイン臨時政府は，24 日付声明において，デンマークによる支配からの完全離脱を宣言する。そこでは，「われわれは，ドイツの統一と自由とのために戦うあらゆる力にみずからを結びつけるだろう」と宣言され，全ドイツの革命勢力への連帯が表明されている[66]。

蜂起に参加した父ベルンハルト・ラートゲンは，臨時政府において法実務を担当していた。ところが，勃発した対デンマーク戦争に介入したプロイセンが，ロシアとイギリスの圧力によって手を引き，8 月末に休戦協定を結ぶ。このことを知ったベルンハルトは，1848 年 9 月の妻宛書簡中で，「プロイセンがそんなに恥辱を背負いこみたければそうすればいい。皆がプロイセンの裏切りを指弾する！」と述べ，怒りを露わにする（Olshausen 1940: 211）。

プロイセンの後ろ盾を失った臨時政府は苦境に立たされる。1849 年 4 月 5 日には，デンマーク艦隊がエッケルンフェルデを砲撃し，父ベルンハルトの弟ヴィルヘルムの家が砲弾の直撃を受ける（Preller 1906: 18）。その後もデンマークに圧倒されつづけた臨時政府は，1851 年に崩壊し，関係者は亡命を余儀なくされる。

キール大学教授のなかには，臨時政府に参画した者が多数いる。父ベルンハルトの盟友ユストゥス・オルスハウゼン（オリエント学者），ヨハン・グスタフ・ドロイゼン（歴史学者），ローレンツ・シュタイン（法学者）らである。彼らは，追放され，あるいはみずからキールを去っていく[67]。さらにシュレースヴィヒ=ホルシュタイン臨時政府の機関紙の編集長だったテーオドール・モムゼンもキールを去る。モムゼンの友人である詩人テーオドール・シュトルムは，この機関誌に作品を掲載したことが咎められ，郷里フーズムを追われる。

過労のため体調を崩していたベルンハルトは，1851 年 6 月に（それまで戦禍を逃れて疎開

していた）子供たちと再会するが，彼もまた追放される。彼は，妻コルネリアの兄マルクス・ニーブール（プロイセンの官僚）の口利きでベルリンの上級地方裁判所の判事職を得るが，既述のように，ベルリンの保守的政治風土のなかで苦境に立たされ，1853年にヴァイマルへの転出を決意する。

その後シュレースヴィヒ=ホルシュタイン情勢が急展開をみせるのは，1863年11月のデンマーク王位交代時である。このとき，デンマーク憲法がシュレースヴィヒに適用されたことがきっかけとなって，ふたたびシュレースヴィヒとホルシュタインの両公国の分離運動が高揚する。これを受けて，ドイツ連邦は，シュレースヴィヒ=ホルシュタイン事情を熟知する父ベルンハルトに指令を下し，現地で諜報活動に当たらせる。彼は，プロイセンとオーストリアがデンマークにたいして開戦する直前の1863年12月に休暇をとり，ピンネベルクの動静を探り，各種情報を収集する。そして開戦後の1864年2月頃，この任務を終えてヴァイマルに戻っている（Olshausen 1941: 133）。

対デンマーク戦争（1864年）の後，1865年8月14日のガスタイン協定によって，シュレースヴィヒをプロイセンが，ホルシュタインをオーストリアが分割統治することになるが，つづく普墺戦争（1866年）におけるプロイセンの勝利の結果，シュレースヴィヒ=ホルシュタイン全体がプロイセンに併合される。

父ベルンハルトは，この大きな事件をふたたびその渦中で体験した。また普墺戦争には長男ベルンハルトが従軍した。こうした経験は，彼にとって，ドイツの将来を考えるうえで大きな意味を有したと思われる。

父ベルンハルトは，このときシュレースヴィヒ=ホルシュタインに樹立された新政府から就任要請を受ける。しかし，1867年7月初旬に，次男カールをともなってエッケルンフェルデを訪れた父ベルンハルトは，当地の実状を詳細に調査し，プロイセンの諸制度を性急に導入した結果，不合理な重税を課せられ，人々がかえって苦しんでいることを知り，憤りを覚えるとともに，みずからがプロイセンの走狗となることを好まなかったため，新政府への参加を辞退している（Olshausen ca. 1943: 100–101）。すでに六十代半ばに差しかかった彼は，まったく新たな――しかもプロイセンとの対立にともなう大きな困難が予想される――職務を担うには，自分が年をとりすぎていることを悟ったのであろう。

一方カールの姉兄たちは，この時期およびそれ以降に，それぞれの知見を増やし，多方面に関心を向け，自己陶冶を果たしていく。

長女イーナは，1864年2月に，シュレースヴィヒ=ホルシュタイン情勢を探るため現地に滞在している父と合流し，その情報収集活動に直接協力している（Olshausen 1941: 254–263）。この当時弱冠21歳であった彼女を，こうした危険をともなう任務に帯同したことから，彼女にたいする父からの信頼は非常に厚いものだったと推察される。彼女はその後（1865年），父ベルンハルトの盟友ユストゥス・オルスハウゼンの息子ローベルトと結婚する。ロー

ベルト・オルスハウゼンは，1861 年以来ハッレ大学病院産婦人科に勤務し，翌年からハッレ大学産科学教室で教鞭を執っている。1864 年には教授になり，後年学長を務め，1887 年にベルリン大学に移る（SHBL（7）：155）。医師であるローベルトは，医療・看護問題との係わりで，社会問題への関心を深めていく。

このローベルト・オルスハウゼンに大きな影響を与えていたと思われるのが，気鋭の経済学教授として頭角を現してきたグスタフ・シュモラーである。シュモラーは，1864 年にハッレ大学に招聘されており，彼は，同僚ローベルトの妻イーナがニーブール家の出であることを知る。また彼女の母コルネリアとも知りあい，やがてコルネリアは，シュモラーの尊敬の対象となる[68]。そしてオルスハウゼン夫婦の仲介で，シュモラーは，「尊敬するニーブールの孫」である三女ルーツィエに会う（Rathgen 1916: 13, Hintze 1919: 382）。シュモラーを紹介されたルーツィエは，1869 年にシュモラーと結婚し，彼女もまたドイツ政治の荒波に目を向けていく。

一方長男ベルンハルト・ラートゲンは，既述のように，プロイセン陸軍に入隊し，普墺戦争に従軍するなど，キャリアを積んだのち，軍事史（とくに兵器史）研究を志すようになる。そして歴史研究のために研鑽を積むなかで，シュモラーとひんぱんに意見を交換している。とくに 1882 年春に，シュモラーはシュトラースブルク大学からベルリン大学に移り，当時ベルリンに住んでいたベルンハルトは，足繁くシュモラー家に出かけて歓談している（Rathgen 1928/87: VII）。後年彼は『シュモラー年報』に三本の論文を寄稿しているが（Rathgen 1904, ders. 1910, ders. 1914），それは北アフリカの商業等にかんするものであるから，シュモラーとのつきあいのなかで，また弟カールからも感化されて，国際関係や貿易へも関心を向けるにいたったのであろう。

次女トーニについては，その結婚の経緯をすでに述べたが，彼女の思想についても付記しておきたい。マックス・ヨルダン――彼もシュレースヴィヒ=ホルシュタイン人である――は，トーニの人となりについて，次のように述べている（Jordan 1904: 167）。

> トーニ・ラートゲンは情熱的な愛国者であり，その父が故国〔シュレースヴィヒ=ホルシュタイン〕に突きうごかされていたがゆえになおいっそう強く故国の苦痛を感じていた。

トーニ自身も，1852 年にベルリンに移るとき，「なつかしい愛すべき故郷に別れを告げることは，両親にとって非常につらいものになった」と記し，大勢の人々が駅に集まって両親に別れを述べた様子を活写している（Preller 1906: 23）。8 歳の彼女の心に焼きつけられた光景は，彼女の愛国心の原点なのであろう。

さてカールは，ラートゲン家の辿った過酷な道程にかんして，父母から話を聞くとともに，父の諜報活動に同行したイーナから，デンマークとの激戦を渦中で体験したイーナとトーニか

ら，さらに普墺戦争に従軍した兄ベルンハルトからもさまざまな情報を得て，自我形成を深めていったと思われる。また 1869 年にカールの義兄となったシュモラーは，すでに小ドイツ主義の立場を鮮明にしており(69)，彼は，この病弱な義弟にたいして思想的に大きな影響を与えたと推察される。こうしてカールもまた，姉・兄・義兄たち，あるいはホフヌングスタールで知りあった人々とナショナルな意識を共有するにいたった。それは，「ドイツ人」たる意識としておおざっぱに括られうるものではなく，むしろシュレースヴィヒ=ホルシュタイン人としてのマージナルな意識であった。彼の周囲にプロイセン人はすくなく，シュモラーも――反プロイセンではないにせよ――ハイルブロン（ヴュルテンベルク）の出身である。

こうしたラートゲン家のナショナルな意識は，一方では反プロイセン・反ビスマルクの傾向を有していた。シュレースヴィヒ=ホルシュタインの出身者の多くは，プロイセンにたいする嫌悪感を内包している。帝国建設への歩みのなかで，自分たちはプロイセンによって見捨てられ，あるいは政治の道具として利用されたという認識に立つからである。そしてもう一方では，挫折したシュレースヴィヒ=ホルシュタイン蜂起を大きな教訓として，プロイセンを中心とした国づくりをしぶしぶ認めつつ――したがって小ドイツ主義に立脚しつつ――，プロイセン中心史観からは距離を置き，むしろ自由主義と結びつき，帝国の枠組そのものを問いなおし，あるいは社会政策の刷新を志向する思想性を胚胎している。

父ベルンハルトの場合，ヴァイマルにおける仕事ぶりをみると，与えられた持ち場において，経済改革と国民生活の向上を図ることに全精力が向けられており，それ自体にはとりたてて体制変革への志向性はみあたらない。このことから，シュレースヴィヒ=ホルシュタイン蜂起挫折後の彼は，穏健な立場へと転じたようにみえる。しかし彼は，自由主義者としてのスタンスを変えておらず，1878 年 2 月に，国民自由会派のリプケとフォルケンベックの招待で，帝国議会を妻とともに傍聴した彼は，ビスマルクの二枚舌を痛烈に指弾するフォルケンベックの演説を小気味よいものと感じている（Olshausen ca. 1943: 117）。

次男カールもそうしたスタンスを大筋で共有しており，学生時代には，ビスマルク・レジームそのものへの批判（社会主義者弾圧法の無法性にたいする批判）を鮮明に打ちだし，それを父宛書簡において表明している（1879 年 1 月 21 日付父宛書簡）。これについてはあらためて別稿で論じることになるだろう。

力による政治を嫌悪し，個人の自由を擁護し，国民生活の矛盾を見据え，国民自身の不満や声を吸いあげた新しい政治を求める見地は，カールが両親から学び，また同世代人たち――姉・兄・義兄たちと学友たち――との交流のなかで育んだものであり，さらに幼い頃からドイツ各地で見聞した政治経済事情を踏まえ，あるいはシュレースヴィヒ=ホルシュタイン蜂起の残党たちの昔話を聞きながら彼が考えたものである。彼は，ただ転地保養して多くの人と触れあっていたのではなく，シュレースヴィヒ=ホルシュタイン問題を手がかりとして，国際政治を考え，社会問題を考え，都市問題を考え，転地先である農村部・周縁地域や僻地の問題を考

え，そこからあるべき国家社会の問題を考えていたのである。

カールとその姉兄たちはまた，アウグストとティーネのトヴェステン夫妻との交友からも大きな精神的影響を受けている。既述のように，長年にわたって物心両面からニーブール家・ラートゲン家を支えつづけたのはトヴェステン夫妻である。とくに 1852 年から 1853 年にかけてのベルリン時代は，ラートゲン家にとって苦しい時期であっただけに，この時期を支えてくれたトヴェステン夫妻にたいする感謝の念は非常に強かった。そのことは，本稿冒頭に掲げた父ベルンハルトの書簡中に明示されている。

ラートゲン家の子供たちは，ベルリンに移った当初，トヴェステン家に身を寄せていた（Preller 1906: 23）。その後も，子供たちにとって，この夫妻を訪ねることはなによりの楽しみであった。それとともに，とりわけティーネ夫人から一家が学んだものは，彼女の不屈の精神であった。彼女の父の破産とともに招来した苦難は，彼女に自制・慎重さ・粘り強さをもたらし，またその後も，子供たちの相次ぐ早世という悲運に見舞われた彼女は，その度ごとにかえってみずからの精神を鍛えていき，喜びも苦しみも分かちあう心情と気骨とを身につけ，さらには故国・教会・大学・学問・芸術といったさまざまな方面へと情熱的な関心を拡げていった（Arndt & Heinrici 1878: 10–12）。こうした受苦の存在として，ティーネ夫人はラートゲン一家の尊敬を勝ちえていたのである。しかもトヴェステン夫妻は，ビスマルクの論敵として勇名を馳せた政治家カール・トヴェステン(70)の両親であって，ここにもまたビスマルク・レジームへの抵抗要素が存在するのである。

Ⅷ　おわりに

病弱で多感な少年は，多くの人々からさまざまな文化要素を吸収し，とりわけシュレースヴィヒ=ホルシュタイン人の誇りを吹きこまれ，またシュレースヴィヒ=ホルシュタイン人としてのアイデンティティをなかば自覚的に確立していく。そのなかで当然にも歴史意識・政治意識に目覚め，しかも彼の祖父が歴史家であったこともあって，ドイツ史・ヨーロッパ史への関心を深め，ランケやモムゼンを熱心に読み，歴史への視座を獲得しようとする。さらに経済官僚としての父の仕事や，姉・義兄・兄の歩みからも刺激されて，政治経済や当面する社会問題への目を養い，反ビスマルク志向を強める。そしてギムナージウムにおける基本学習を終えた彼は，現代政治への批判的見地を先鋭化させ，あるべき現代的ナショナリティを探求し，やがて彼がこれまでに受けてきたさまざまな感化・影響を昇華しつつ，独自の社会経済史研究へと乗りだしていく。それが彼の大学時代の意義である。その彼にとって重要な導きの糸を与えたのは，グスタフ・シュモラーとゲオルク・フリードリヒ・クナップである。

ラートゲンは，四つの大学で計 10 学期間（5 年間）学んでいる。そのうち最長の 5 学期間を過ごし，また学位論文を提出したのはシュトラースブルク大学である。ギムナージウム修了

後の彼の思想形成にとって，シュトラースブルクは格別の意義を有している。また講義受講のために 1 学期間だけ在籍したハッレ大学時代，司法官試補試験受験のために 2 学期間在籍して猛勉強したライプツィヒ大学時代，ヴァーグナーに（おそらくはグナイストにも）学んだベルリン大学時代も，それぞれ彼の成長ぶりをしめしている。その 5 年間研鑽を積んでいく彼の姿を辿り，法学から経済学へと立ち位置を変えていく彼の歩みを確認することは，その後の新聞社への就職と，急遽渡日して教壇に立つようになる経緯を解明することとともに，この青年がどのようにして自分の足でしっかりと歩みはじめるのかを理解するために不可欠の作業である。これは本稿に続く考究課題である。

〔注〕

(48)　本稿中で出典をしめさず日付のみ記しているラートゲンの書簡のうち，1880 年までのものは B・C・ヴィッテ氏が所蔵しており，1882 年から 1890 年までのものは H・フォン・デーン=ロートフェルザー氏が所蔵している。以下同様。

(49)　Todtenbuch der ev. Gemeinde in Weimar. Jahr 1878. S. 154. Ev. Pfarramt Weimar „Totenbuch 1876–1879“ S 6/8［Mikrofiche］. Evangelisch-Lutherische Kirchgemeinde Weimar.

(50)　アマンダの 1872 年 3 月 22 日付ラートゲン宛書簡（Privatarchiv B. C. Witte）。

(51)　彼の直系子孫のなかにも頭痛を引きおこしやすい体質をもつ者が含まれている。

(52)　Abiturienten, Ostern 1876. Abiturientenprüfungen Vol. II 1850 – 1880. Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar.

(53)　Censurbücher für Schüler des Grossherzoglichen Gymnasium zu［Weimar］. K. Rathgen, erstes Buch, S. 8. Privatarchiv B. C. Witte.

(54)　Ebd., S.9.

(55)　バウムガルテルのラートゲン宛 1869 年 5 月 1 日付書簡による（Privatarchiv B. C. Witte）。

(56)　WEG には毎年かなりの数の転入出が認められ，また留年もあるから，転入・留年によって次年次に同学年生数が増加しているケースもある。生徒の学校間移動はごく一般的なことだったと思われ，1876 年に WEG を修了した 12 名のうち，最初から最後までこの学校で学んでいた生徒は，ザイデル（1866 年入学）とヴェルナー（1867 年入学）のわずか 2 名を数えるだけであり，あとの 10 名（ラートゲンを含む）はいずれも他校からの転入生である（既出表Ⅴ–2 参照）。

(57)　*Jahresbericht über das Wilhelm-Ernstische Gymnasium zu Weimar,* 1874–1875, S.25, 1875–1876, S.4. Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar. 他の年次においても，ランケやモムゼンの同じ本の読解によって表彰されている学生がいるので，ランケやモムゼンは，ラートゲンが選んだ書目ではなく学校の指定図書である。また，1874 年にはラートゲンの同学年生 14 名中 4 名が，1875 年には 12 名中 3 名が，さまざまな科目履修や図書読解によって表彰されており，表彰を受けたからといってとくに優秀だったことにはならない。実際，表彰者のなかには総合成績下位の者も含まれているから，学校側は，なるべく多くの生徒にたいして，それぞれのいいところを取りあげて表彰しようと配慮したと思われる。

(58)　とくにラートゲンとイェルスとはたいへん仲がよく，後年両者ともライプツィヒ大学で学んでいたときには同じアパートを選び，上下階の窓越しに会話できた（1879 年 4 月 22 日付書簡）。その一方で，軽薄でおしゃべりなある学友には，ラートゲンはどうしても好意をもつことができなかった（1888 年 2 月 21 日付書簡）。

(59)　1874 年秋の通信簿において，「おしゃべりや，他の生徒に答を教えることをしないよう注意しな

くてはならない」と評されており，快活さがときとして羽目を外しがちなことが教師の目に止まっており，このことは，この頃彼の健康状態が比較的良好で，学校生活にもなじんでいることをしめしている（Censurbücher für Schüler des Grossherzoglichen Gymnasium zu［Weimar］. K. Rathgen, zweites Buch, S.7. Privatarchiv B. C. Witte）。

(60) 及第者を三段階で評価しており，「優（1）」「良（2）」「可（3）」の「良」に相当する（Abiturienten, Ostern 1876. Abiturientenprüfungen Vol.II 1850–1880. Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar）。ラテン語とギリシャ語は，ともに継続反復学習の積み重ねがとくに重要な科目であり，二度にわたって退学を余儀なくされ，学習の継続性を保つことが困難だったラートゲンにとって，もっとも学業成績上の悪影響が出やすい科目だった。実際，各学期の通信簿においても，とくにギリシャ語の筆記・文法に難があり，またラテン語にも弱点があり，努力と上達は認められるが，なかなかこれを克服できなかったことが記されている（Censurbücher für Schüler des Grossherzoglichen Gymnasium zu［Weimar］. K. Rathgen, erstes Buch, S. 5, 8 und 9, zweites Buch, S.5, 6 und 8. Privatarchiv B. C. Witte）。

付言しておくと，WEG には「英語」という科目がなかった。ラートゲンは，シャフナー学院では英語も学ぶことができたようであるが，ギムナージウム期全体を通じて英語を体系的に学習していなかったため，青年期の彼は英語の能力があまり高くなかった。このため，渡日するさい，英語で授業を担当する能力があるかどうかが問題になった。

青木周蔵は，1882 年 2 月 9 日付福岡孝弟宛書簡のなかで，次のように述べている（東京大学史史料室所蔵「文部省往復」A 45–111）。

> 古今之語学ニモ致通暁候内最モ仏語ヲ能クシ又英語ヲモ致了解申候尤英語之義ハ具〔其？〕理解ニ長シ尚ホ言語ニハ熟セサル由ニ付目下直ニ條約第十一条ニ原キ教授之際英語ヲ以致講釈候事ハ無覚束候併シ航海中ハ勿論本邦到着之上モ勉メテ対話的ニ英語ヲ学ビ急ニ条約第十一章之旨ヲ奉スヘシトノ決意ニ御坐候

老練の碩学が得られればそれに越したことはないが，それが不可能なので，「不得止前顕英語未熟之教師雇入候次第ニ有之候」と青木は弁解し，さらに，ラートゲンは英語よりもフランス語が得意なので，最初のうちはドイツ語またはフランス語で授業できるよう取りはからってほしいと福岡にたいして依頼している。ここから明らかなように，青木は，ラートゲンの英語能力を疑問視している。

青木は，ラートゲンが「航海中」にも「勉メテ対話的ニ英語ヲ学」ぶ決意であると述べている。その言のとおり，ラートゲンは，ボローニャから同じ船に乗りあわせたイギリス人たちから英語のレッスンを受けている（1882 年 2 月 15 日付ラートゲン書簡）。

しかし付け焼き刃ではなかなかうまくいかなかったらしく，1882 年 4 月～6 月にラートゲンの授業を受講した学生・山田一郎は，ラートゲンの英語力を酷評している（『読売新聞』1905 年 5 月 11 日付）。また，同年に予備門に入学した朝比奈知泉（1888 年頃に中退）によると，「最初来たばかりの時よりは大分達者にはなつて居た」けれども，それでもラートゲンは「it are という言葉を能く使つて居た」という（朝比奈知泉　1938: 268）。山田や朝比奈らは，大学予備門において（あるいはそれ以前から），英語漬けの日々を送っており，英語能力の高かった彼らからみると，ラートゲンの英語はおぼつかないレベルのものに映ったのである。

しかし，テーオドール・プラウトは，ラートゲンが「英語とフランス語を，母語と同様に流暢に話した」と評しており――これには多少お世辞が入っているのかもしれないが――（Plaut 1927: 212），後年，英語への熟達はいちじるしかったように感じられる。

(61) フィッシャーは，おそらく病気のため大学入学資格を取得せず，修了翌年に亡くなった。またハ

イネマンは，資格を取得しながら大学に入らず軍務に就いた（Abiturienten, Ostern 1876. Abiturientenprüfungen Vol.II 1850–1880. Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar）。

(62)　*Jahresbericht über das Wilhelm-Ernstische Gymnasium zu Weimar,* 1875 – 1876, S. 14. Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar.

(63)　そのため，カールがシュトラースブルク大学に入学してヴァイマルを去ると，父ベルンハルトは軽い虚脱状態に陥っている。カールが大学に入学して五カ月ほど経ち，たまたま妻コルネリアもひとりでエッケルンフェルデに滞在していたとき，ひとりヴァイマルに残っていた父ベルンハルトは，ティーネ・トヴェステンに宛てて書簡を書き（1876 年 9 月 10 日付，発信地カールスバート），家族が目下（一時的にせよ）すべてバラバラに散っていることを記し，一家揃ってトヴェステン家に滞在していた頃を懐かしがっている（Brief: Cb 55, 55: 31, 01. Schleswig-Holsteinische Landesbibliothek）。

(64)　滞日時のエピソードのひとつとして，歌舞伎体験が重要である。ラートゲンは，「ヴァーゲナー〔ワグネル〕博士と，私の卒業生のひとりで，通訳を務めている中川と」から二本の芝居の券を贈られ，1884 年 7 月 17 日にそれを観ている。観劇したうちの第一演目は，農民「サクラのソウゴロウ」についての有名な物語とされており，歌舞伎『東山桜荘子（佐倉義民伝）』だと推定できる。主役を演じた「ダンジュウロウ」の名演をラートゲンは特筆している。これは，上演年代から，九代目市川團十郎（1838–1903）だとわかる。封建領主の圧政に苦しむ農民というテーマはラートゲンの興味を惹いたようだ。それは後の『日本の国民経済と国家財政』にも通底するモティーフである。ラートゲンは，この第一演目について，「非常に観る価値がある」として，その内容について詳細に語っているから，中川が傍らで通訳していたのであろう。その一方で，第二演目については，「大がかりな殺人物語（eine große Mordgeschichte）」と記すのみで，ラートゲンはその内容にまったく触れていない（1884 年 7 月 22 日付書簡）。おそらく『忠臣蔵』だと思われる第二演目は，このとき彼の関心外だったか，あるいは第一演目をみて疲れ，第二演目には集中できなかったかのいずれかであろう。

(65)　のちにエルヴィン・ベルツは，滞日時のラートゲンについて，「繊細で，少しとり澄ましたところのある好青年」だったと評している（ベルツ　2000: 297）。

(66)　ここに引用した箇所（Hagenah 1933: 509）では，デンマーク対シュレースヴィヒ=ホルシュタインの問題が，デンマーク対全ドイツ民族の問題へと拡大されて表現されている。ところが，こうした表現は，フリードリヒ・フォン・レーヴェントロウによる草稿には存在せず，それはドイツ民族統一を主張するヨハン・グスタフ・ドロイゼンの指示によって加筆されたものであることが確実視されている（ebd.: 507–508，柴田隆行 1997–2000（下）：380）。

(67)　その後オルスハウゼンはケーニヒスベルクに，ドロイゼンはイェーナを経てベルリンに，シュタインはヴィーンに職を得ている。

(68)　シュモラーは，大著『一般国民経済学要綱』を妻ルーツィエに献呈するさい，ルーツィエの「高貴な母」（コルネリア）に言及している（Schmoller 1900: III）。

(69)　小ドイツ主義にかかわるシュモラーの思想的な歩みについては前谷和則が詳細に論及している（前谷和則 1986）。それによると，シュモラーの小ドイツ主義は，彼の義兄グスタフ・リューメリンと，1857 年から 1859 年にかけて学んだテュービンゲン大学の歴史学教授マックス・ドゥンカーからの影響が大きかったようだ（前掲書：381 f.）。

注(66)にしめしたように，シュレースヴィヒ=ホルシュタイン蜂起は大ドイツ主義に立脚していたことが明らかだが，ドロイゼンの大ドイツ主義に従っていた父ベルンハルト・ラートゲンは，シュモラーとの邂逅を契機として，小ドイツ主義へと立場をシフトさせたと思われる。父ベルンハルトは，後年社会政策学会大会に出席しており，そうした行動も，シュモラーから示唆を受けて，新しいドイツの国策の方向性を探ろうとする姿をしめしているのであろう。

(70)　カール・トヴェステンは 1870 年に亡くなっており，当時カール・ラートゲンは 13 歳であったから，この少年が彼と面識があったにしても，ラートゲンの思想形成にさいして彼が与えた影響は，主として，彼の著作や，彼にかんする他の人（彼の両親等）の話を通じた間接的なものであった思われる。しかしライプツィヒ大学在学中，ラートゲンは，ビスマルクとトヴェステンにかんするリプケの論稿（Lipke 1880）を（おそらく父の勧めで）大学図書館で読んでいるから，関心をもっていたのはたしかである（1880 年 2 月 2 日付書簡）。

〔文献〕

Arndt, F. & G. Heinrici 1878: *Worte der Erinnerung, gesprochen am Sarge der entschlafenen Ober-Consistorialräthin und Professorin Katharina Twesten am 15. October 1878.* Berlin: E. Krause

Hagenah, H. 1933: Der Verfasser des Aufrufs „Mitbürger“. *Zeitschrift der Gesellschaft für Schleswig-Holsteinische Geschichte,* 61

Hintze, O. 1919: Gustav Schmoller; ein Gedenkblatt. *Forschungen zur brandenburgischen und preußischen Geschichte,* 31

Jordan, M.（Hrsg.）1904: *Friedrich Preller der Jüngere; Tagebücher des Künstlers.* München-Kaufbeuren: Druck und Verlag der Vereinigten Kunstanstalten

Lipke, G. 1880: Bismarck und Carl Twesten. *Deutsche Revue über das gesammte nationale Leben der Gegenwart,* 4. Jg., H. 2

Olshausen, J. v. 1940: Briefe aus Schleswig-Holsteins schwerster Zeit. *Zeitschrift der Gesellschaft für Schleswig-Holsteinische Geschichte,* 68

Olshausen, J. v. 1941: Briefe aus der Zeit der Befreiung Schleswig-Holsteins. *Zeitschrift der Gesellschaft für Schleswig-Holsteinische Geschichte,* 69

Olshausen, J. v. ca. 1943: Johann Bernhard Hederich Rathgen, ein niederdeutscher Charakterkopf. Manuskript

Plaut, Th. 1927: Rathgen, Karl Friedrich Theodor. *Deutsches Biographisches Jahrbuch,* Bd.3（Das Jahr 1921）. Stuttgart u. a.: Deutsche Verlags-Anstalt

Preller, T. 1906: *Grossmutter erzählt ihren Enkeln ihre Jugendzeit.* Dresden: A. Arnold & Gröschel

Rathgen, B. 1904: Oran; Nordafrikas wichtigster Handelsplatz. *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich,* XXVIII

Rathgen, B. 1910: Tunesien, seine heutige Verfassung und Verwaltung. *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich,* XXXIV

Rathgen, B. 1914: Die Eisenbahnpolitik Frankreichs in Nordafrika. *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich,* XXXVIII

Rathgen, B. 1916: *Lebensskizze und Charakterschilderung unserer Mutter.* Köln: DuMont Schauberg

Rathgen, B. 1928/87: *Das Geschütz im Mittelalter,* neu herausgegeben und eingeleitet von Volker Schmidtchen. Düsseldorf: VDI-Verlag

Schmoller, G. 1900: *Grundriß der allgemeinen Volkswirtschaftslehre,* erster größerer Teil. Leipzig: Duncker & Humblot

SHBL: *Schleswig-Holsteinisches Biographisches Lexikon,* Bd. 1 – 5（1970 – 79）. *Biographisches Lexikon für Schleswig-Holstein und Lübeck,* Bd.6–11（1982–2000）. Neumünster: Wachholtz

朝比奈知泉　1938『老記者の思ひ出』中央公論社

柴田隆行　1997–2000「キール大学法学部とシュタイン」（上中下）『東洋大学紀要　教養課程篇』36, 38, 39

ベルツ（E）〔若林操子・池上弘子訳〕2000『ベルツ日本再訪　草津・ビーティヒハイム遺稿／日記篇』東海大学出版会
前谷和則　1986「グスタフ・シュモラー　伝記と文業解題」中京大学『教養論叢』27–3

〔付記〕

本稿は，平成 22 年度佛教大学特別研究費による個人研究の成果の一部である。貴重な史料を貸与されたラートゲンの令孫バルトルト・C・ヴィッテ博士のご厚情に深謝する。また手稿類の探索およびその判読のためにご助力を賜った各公文書館・図書館のスタッフの方々に深謝する。

（のざき　としろう　公共政策学科）

2011 年 10 月 31 日受理